

職業安定広報

特集①公正な採用選考システムの確立に向けて

特集②日本とインドネシアの経済連携協定(EPA)に基づく看護師・介護福祉士の受け入れについて



想苑 人と人をつないでくれる囲碁 囲碁棋士 梅沢由香里

しごとインタビュー 木造船製作 佐野末四郎さん

ハローワークへの提言 地元企業の声④ 株式会社東武宇都宮百貨店

今月の職業 ホテル従業員



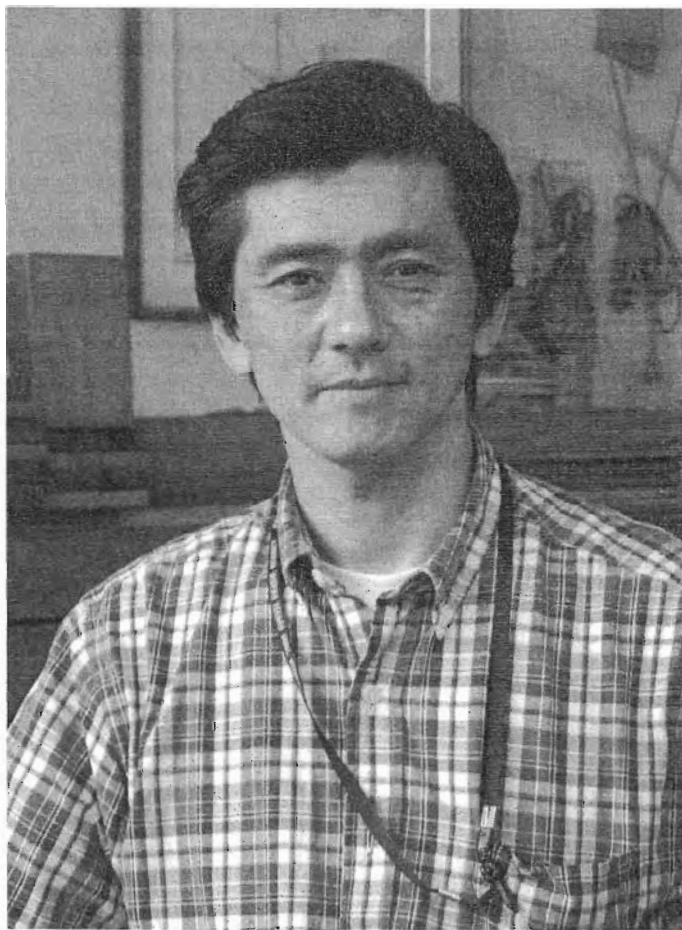
7
2008

全力を注ぎ込み、最高の船を造りたい

佐野末四郎さんが造る木造艇は、その美しさの高い技術力で世界から注目されています。お話からは船造りにかける技術者としての誇りと気高さが伝わってきます。



「SANOMAGIC」とは、佐野さんの木造艇造りの技術に感嘆してアメリカの木造船専門誌『Wooden Boat』が名付けた称号である。



木造艇製作 佐野末四郎さん

PROFILE

さの すえしろう ●昭和33年東京生まれ。江戸時代から続く造船を家業とする家に生まれる。15歳から18歳まで3年間かけ製作した外洋ヨットがアメリカの木造船専門誌『Wooden Boat』で紹介される。工学院大学専門学校造船科を卒業後、家業に従事。平成3～4年にかけてオランダの王立ハイスマン造船所に勤務。帰国後、家を離れ苦勞しつつ船造りを再開。現在、SANOMAGICを主宰し、木造艇の製作のほか、木工家具作りも手掛ける。

祖父や父の船造りの様子を見ながら育つ

— 佐野さんは江戸時代から代々続く造船を家業とするお宅にお生まれになりました。船造りというお仕事に就かれたのも、自然の成り行きということでしょうか。

佐野 私の家は代々造船を営む家系で、私で9代目になります。仕事場の前にはレールが敷いてあり、川に続いていました。船を引き上げた

り、下ろしたりするためです。子どもはそこにながって来た魚を採って遊んでいました。また自分で木を削って船の模型を作り、スクリーンをつけてゴムを巻いたり、モーターをつけたりして水の上を走らせていました。つまり、祖父や父の仕事場が私の遊び場だったわけです。

物心ついたときには自分は船大工になるのだと決めていましたね。小学校の卒業アルバムには「世界一の船大工になる」と書いたくらいです。そう決心した一番の理由は、子ども

心にも船を作る祖父や父の姿をとっても誇らしく感じたからです。

15歳で外洋ヨットの製作に着手し、3年がかりで完成

— すでに中学生のとき、外洋に出ることができるようほどの船造りに着手されたとうかがっています。どのような少年時代を送られたのですか。

佐野 とにかく1日も早く自分で船を造りたかったのです。中学生になったところから父に船体設計を習い

カヌーのオールの製作。青森県の「みちのく北方漁船博物館」を訪れた方が、同館に展示してあった佐野さんが製作したカヌーのオールの美しさに魅かれ、注文してきたという。



「SANOMAGIC-佐野末四郎の世界」(<http://sanomagic.world.coocan.jp/>)。佐野さんの歩みやこれまで造った船、仕事に対する考え方などが豊富な写真とともにまとめられている。

始めました。親からは「昔は小学校を出てすぐに働く人も多かった。しかしこれから船を造るには、船大工としての腕はもちろん、頭脳も大切だ。学校の勉強をおろそかにしてはいけない」と言われていました。確かに船の設計や性能表の作成には数学や物理の知識を駆使しなくてはなりません。学校で相応の成績を上げ、それを落とさないことを親と約束して、寝る間も惜しんで授業の予復習と船造りを続けました。

初めて自分で船を造ったのは小学校5年生の時です。ベニヤ板でデイングーと呼ばれる小型ヨットを造りました。その後、15歳で外洋ヨットを造り始め、3年がかりで完成させました。「プリティエンジェル」と

名付けたこのヨットは日本の木造船艇として初めてアメリカの木造船専門誌『Wooden Boat』に掲載されました。

実はこの「プリティエンジェル」は祖父に負けたくないという思いから造ったものです。祖父は、京浜地区きつての船大工の名人と言われた人で、20歳のころにはすでに20トンのマグロ船を造っていました。「だったら俺はもっと若いときに、おじいさん以上のものを造らなければ」と思ったのです。

自分の技術力を確かめるため 海外で働く

—その後、専門的に造船の勉強をされ、お父様たちと一緒に働くようになるわけですね。

佐野 高校卒業後、専門学校の造船科で学びました。そこを卒業し、父たちと一緒に働くようになりました。

『Wooden Boat』が私が造った「サクセッサ号」と名付けた木造船艇の特集を組んでくれたこともあって、テレビ局の取材が相次ぐようになりしました。また、この世界で

名を知られた人たちが私たちの仕事場を訪れるようになりました。

—大型艇の造船では世界一と言われるオランダのハイスマン王立造船所で働いていらっしゃいますね。ここで働くようになったのはどのようないきさつがあったのですか。

佐野 いろいろな取材を受け、様々な方が訪れるようになって、父は自分たちの船造りの技術を自慢するようにになりました。しかし私は「井の中の蛙」ではないかと少し冷めた目で見えていました。それと同時に海外で自分の技術がどこまで通用するか確かめたいと思うようになったのです。

そこで『Wooden Boat』の編集長が来日したとき、アメリカで自分が働く造船所がないか探してほしいとお願いしました。後に彼から手紙が来て「アメリカではあなたの技術を生かせるような所はない。オランダのハイスマン王立造船所ならこれからのあなたにとっても得られるものも大きいのではないかと」とアドバイスしてくれました。

その後しばらくしてハイスマン王立造船所の社長が東京ポートショーのために来日されたとき、彼は私の

造った船を見て「すばらしい技術だ、ぜひ来てくれ」とおっしゃってくださいました。それでハイスマン王立造船所で働くことになったのです。

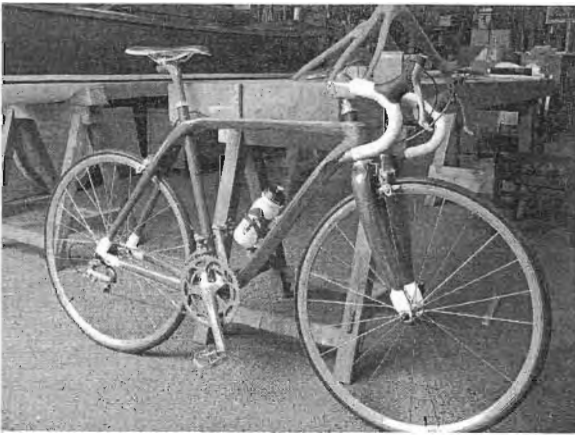
ハイスマンで1年ほど働き、その後半年ほどはヨーロッパ各地の造船所を見て歩きました。そして父が自慢していた我々の技術は確かに優れていると感じるようになりました。しかし、同時にそれは原石のまま、磨きをかけなければ今後は通用しないのではないかとということも強く思いました。

家を離れ、苦労の日々を送る 家具作りで高い評価

——帰国後、家を離れご自分でお仕事を始められますよね。

佐野 当時、日本はバブルが崩壊し、船に対する需要も大変少なくなっていました。そんな中で「木造で素晴らしい船を造り世界を市場として考えたい」と言う私と周囲の人々の意見が合わず、家を離れました。といっても船造りの仕事ですぐにあるわけでもなく、日雇い仕事などで生活費を稼ぐという毎日でした。

その後、ある所でアルバイトをし、



佐野さんが試作した木造自転車。きわめて軽量でその製作過程で培った技術は木造船造りにも生かされると言う。

生活も少し落ち着いてきました。そのアルバイト先の作業場で就業時間後に機械を借りて、家族で使おうといすとテーブルを作らせてもらいました。それを見たアルバイト先の社長が「すばらしい。画家の平山郁夫さんが賞を取られたのでお祝いにこのいすを送ろう」と言うのです。それでいすを平山さんにお送りしたのですが、しばらくして送り返されてきました。やはり私ごときが作った物ではお気に召さなかったのかなと意気消沈したのですが、そうではありませんでした。「実に素晴らしい作品だ。きっと後に価値が出るから、名前と日付、製造番号を入れるよう

に」と返してくださいだったので。すぐにそれらを彫りこみ、再びお送りしました。やがて家具作りで独立し、10坪ほどの作業場を借りて仕事をやるようになりました。

——船造りはどのようにして再開されたのですか。

佐野 私が自分で作った家具の展示会を開いたときに、たまたま以前から知っていた方がいらつしやり、近況などをお話ししました。それがきっかけになって東京ポートショーに私が造ったデザインギーが展示され、青森の「みちのく北方漁船博物館」が購入してくださいました。この船はこの博物館に展示されています。やがて、続けて船造りの注文をいただくようになりました。

先祖が培ってきた優れた 造船技術を形にして伝えたい

——「苦労を重ねた後に再び船造りを始めたわけですね。

佐野 船造りはもうできないかもしれないなと思つた時期もありました。しかし船造りに戻ったからには最高のものを造ろうと決意しました。

日本には江戸時代以来の優れた和船造りの技術があります。明治になって西洋の造船技術も取り入れ、さらに優れた技術を培ってきたという歴史があります。それが私の先祖たちです。私は彼らが残した技術の粋を何としても形にして伝えたいのです。

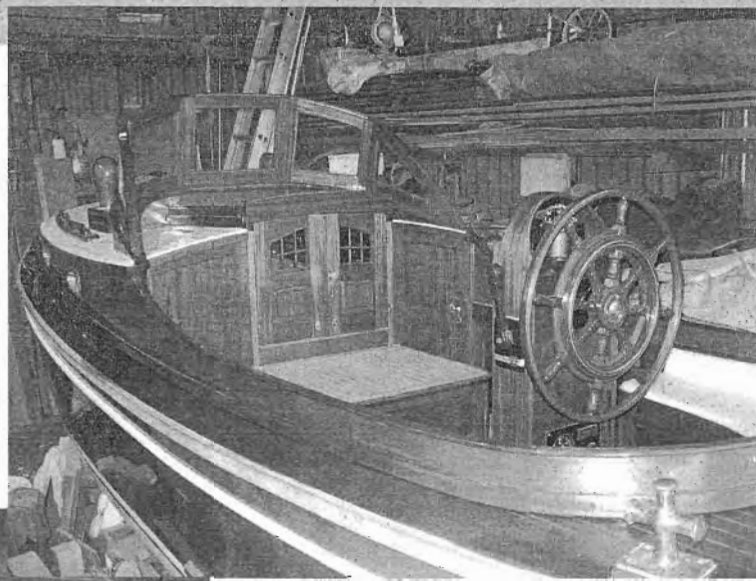
船造りというのは決してもうかる商売ではありません。しかしそれは問題ではありません。私はとにかく世界中のどこに出しても「素晴らしい」と言われる船を造りたいのです。そうしないとこれまで先祖たちが培ってきた技術が消えてしまいます。先祖たちは誇りと生きがいを持って船造りをしてきました。だから今までの技術が残っているのです。

祖父は「お天道様に恥じないように生きなさい」とよく言っていました。だが、私にとってその生き方とは、利益を超えて素晴らしい船を造るということです。お金はもちろん大切だけれど、何よりも私は誇りを持ち、胸を張って世の中を生きていける仕事をしたいのです。仕事というのはお金もうけの手段ではない。最高の船を世の中に残すこと、それが私の仕事であり、役目なのです。だから

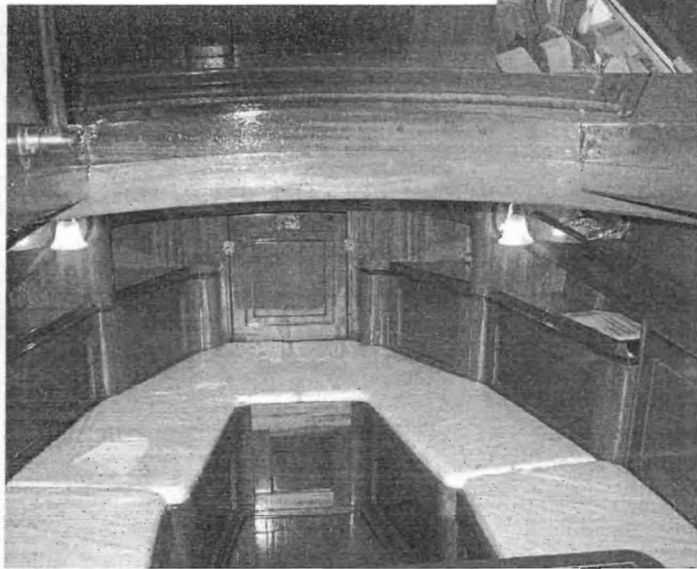
INTERVIEW

しごとインタビュー

平成14年2月、ドイツ・デュッセルドルフで開かれたヨーロッパボートショーに出展したランチボート(モーターボート)とその内部。材料として主にマホガニーが使われ、美しい姿を誇る。重量は690キログラムで、展示場を訪れた人々はその軽さに驚嘆したという。東京・神戸間を無給油で往復できる。



体が許す限り、船を造り続けたいですね。
佐野さんが造る船はどのような工程を経て完成するのですか。



佐野 ヨットを例に説明しましょう。注文をいただくお客様との打ち合わせをし、完成品の10分の1の「線図」を描きます。これを基に模型を作り、次に等寸大の「原図」をベニヤ板に描きます。この「原図」は木を切るときの型紙のようなもので、後からのやり直しができないだけに、その作成には細心の注意を払います。その後材料を切り出し、組み立てに入ります。

船を造るお仕事の中で、どのようなことを心掛けていらっしゃいますか。

佐野 お客様に喜んでいただくことはもちろんですが、「自分の作品」

として世に送り出したいということですね。一艘一艘、大きさも形も違う船を造っているのですが、いつも自分がそのときできる最高のものを造りたいと全力を注ぎ込みます。そして私が死んだ後も「ものすごい技術者がいたものだ」と言われるような船を送り出したいと思います。私は子どもや孫の代になっても「お前の親父はすごい」「お前のじいさんはすごい」と言われる船を造りたい。中途半端なものを造ったら子どもや孫がかわいそうでしょう。

このごろ、若い人たちは仕事との関係が希薄だと言われています。なかなか就職せず、あるいはいったん仕事に就いてもすぐに辞めてしまふという若者が少なくないようです。どのようにお考えでしょうか。

佐野 仕事を「お金を得るための手段」と考える傾向が顕著になってきているような気がします。そうすると仕事でやりがいを感じることは二の次になってしまいます。私は「それでおもしろいのだろうか」と疑問を感じざるを得ません。自分が夢中になれるもの、寝ても覚めても頭の中で絶えず考えているようなこと、またこれが完成したら人々が驚くだろう



佐野さんは「世界中の人々が驚くような最高の船を送り出したい」と一艘一艘に全力を注ぎ込んで船を造る。

うなというようなこと...そうしたワクワクした気持ちを感じることが仕事の醍醐味なのではないでしょうか。

私は仕事をしていて毎日が楽しい。この船が完成したらお客様はきっとお喜びになるだろう、この船を見たらみんなが驚くだろう...そう思っているからです。私の船造りは人々の感動と驚きを与えることができる仕事だと思っています。このような仕事に就けてとても幸せです。